

「古典」としてのキリシタン文献 その語学書について

丸山 徹

南山大学文学部 教授

1. はじめに

現代においてはもちろんのこと、これまでの人間の歴史においてキリスト教世界の古典が果たしてきた役割には大きなものがある。そうした古典の日本における受容を考える上で、16世紀から17世紀にかけて来朝したイエズス会士の手になる「キリシタン文献」について考えることは極めて重要であろう。本研究はその中の「語学書」を中心に考察を進めるものである。

キリシタン文献語学書はこれまで主として中世日本語研究資料として（国語学の分野で）取り扱われてきた。しかし、ポルトガルから「西のブラジル」に千人規模の大移民団とともにイエズス会に入った1549年、その同じ年に、「東の日本」にフランシスコ・ザビエルが到着しているのである。キリシタン文献語学書の研究には、少なくとも以下の三点を背景に据えて臨まなければならない。

- (1) ポルトガルにおける(16・17世紀の)ラテン語・ポルトガル語語学書の成立
- (2) 同時代のアフリカ・ブラジル・インド、そして日本における(ポルトガル語で書かれた)現地語語学書の成立
- (3) 中世日本語の諸相

2. 「古典」ということば、成立の背景

1595年イエズス会編纂の羅葡日辞書（ラテン語・ポルトガル語・日本語辞書）における *Classicus* の項目には、「兵船」(ひょうせん)「集中」(あつまりぢゅう)といった日本語が当てられ、ポルトガル語で概略、「艦隊」、「団体」という意の説明が見られる。

[*Classicus, a, um. Lus. Cousa De armada. Iap.*

Fiõxenni ataru coto. ¶ Item, Cousa de classe, ou ordem. Iap. Cumi, atçumarigiũni ataru coto. ¶ Classici autores. Lus. Autores classicos. Iap. Latin no xouo iyaxiqi cotobauo majiyezu xite caqi voqitaru fitobito... (p.123)]

これは、本来、*Classicus* が *Classis* 「艦隊」(国家の危機に際し艦隊を寄附することのできる人) に由来し、そこから「人間の精神の危機を克服するに足る言葉や考えを内蔵する書物」という意味が派生したこと(注1)を反映するものである。*Classici autores* という表現に至りはじめて、「ラテンの書を卑しきことばを交へずして書きおきたる人々」という現在の「古典」の意に近いものが見出せる。

一方、同じくイエズス会編纂の日葡辞書（日本語・ポルトガル語辞書）(1603 - 04)における *Coden* の項目には「古(いにしへ)の典(のり)」,ポルトガル語で「昔の法」とある。

[*Inixiyeno nori. Leis antigas(54v.)*]

これは「古典」ということばが、古く中国で「尊重さるべき(規範的)巻物が台の上に乗っている姿」に由来し「古い規範・模範・前例・制度・法度などを伝える文献」の意であったこと(注2)を反映するものである。

このように「古典」ということばの成立一つに関しても、キリシタン文献の記述には興味深いものがある。

3. キリシタン文献語学書

キリシタン文献には大きく分けて「宗教書」「文学書」「語学書」があるが(他にももちろん様々な分類の仕方がある),ここではまず、主として16・17世紀に印刷された、以下のような「語学書」について考察する。

- ① 文法書
- ② 辞書
- ③ ドチリナキリシタン

ドチリナキリシタン(キリスト教要理)は普通には「宗教書」に分類すべきであろうが、ここで「語学書」として扱うには理由がある。(「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献 - 南山国文論集17に詳述)その「宗教書」としての側面を否定するものではない。またドチリナを「語学書」として分類するのは、小論の独自の立場ではなく、ポルトガル国立図書館の目録(の)においても「語学書」の中に入っている。

こうしたキリシタン文献語学書は16・17世紀にイエズス会の手で編纂されたものだけでも多数に上る。今、ポルトガル語で書かれ、印刷物の形で現在にまで伝えられるものに限ると、概略、下記の諸言語について、それぞれ次のようなものが確認される。

- アフリカ(コンゴ語ドチリナー点、キンブドゥウ語文法書一点、ドチリナー点)
- ブラジル(トゥピ語文法書二点、ドチリナ二点、キリリ語文法書一点、ドチリナー点)
- インド(コンカニ語文法書一点、ドチリナ二点、タミル語辞書一点、ドチリナ二点)
- 日本(日本語文法書二点、辞書三点、ドチリナ四点)(漢字・かな表記のものを含む)

以上、数の点からだけ見ても、日本のものが一番充実している事は明らかである。その内容について今、詳しく述べる事はできないが、文法書も辞書も日本語に関するものより以上に充実した内容を持つものはない。ドチリナについては翻訳論の立場から種々の吟味が必要となるが、日本語の四版が翻訳としても極めて高いレベルのものであることはまちがいない。

4. なぜ日本のものが質量ともに充実しているのか

キリシタン文献語学書はなぜ日本のものが数の点でも質の点でも一番、充実しているのだろうか。それには以下のようにいくつもの理由が考えられる。(「ザビエルとロドリゲス」南山大学ヨーロッパ研究センター報第6号に詳述)

- (1) 日本は(少なくとも都まで)一言語であった。アフリカ、ブラジル、インドは事情が全く異なる。
- (2) イスラム圏と違って日本でははじめ「通訳」がほとんど役に立たなかった。
- (3) 日本人は読み書き能力が高く、文書でキリスト教を広めることが可能だった。(キリシタン文献はローマ字のものばかりでなく、日本の文字で印刷されたものも多い。)

- (4) 口頭による宣教から潜伏宣教への方針転換の必要が布教の途上で生じた。
- (5) 日本では現地の教養人の協力が得られた。
- (6) (百万塔陀羅尼以来の)印刷の伝統、また長い写本の伝統があり、よい和紙もあった。
- (7) 「ザビエル精神の継承者」ヴァリニアーノが日本に印刷機を齎し、現地日本で印刷できた。

5. 辞書の受容と変容

こうした語学書の研究は、上記1でも述べたように、これまでは主として中世日本語研究の一環として為されてきた。しかし、上に言及した羅葡日辞書ひとつとっても、それをヨーロッパの伝統と切り離して考える事は全くできない。この羅葡日辞書はヨーロッパ辞書史上においても大きな存在のカレピーノラテン語辞書の一形態であるが、「ルネサンス期に編まれた辞書で、重要なものはほとんどすべてが直接間接にカレピーノの影響を受けている」という。(注3)カレピーノの辞書は1502年に北イタリアのレッジオで初版が出されていて、はじめのうちはラテン語(・ギリシャ語)辞書であったが、16・17世紀と時代が進むにつれて収録言語の数も増え、以下のように、三言語以上を収める諸版が生まれてくる。(注4)

三言語

- ① ラテン語・ギリシャ語・イタリア語(15版)
- ② ラテン語・ポルトガル語・日本語(1つの版、羅葡日辞書のみ)

四言語

ラテン語・ギリシャ語・イタリア語・スペイン語(1つの版)

五言語

- ① ラテン語・ギリシャ語・ドイツ語・フラマン語・フランス語(2つの版)
- ② ラテン語・ギリシャ語・イタリア語・フランス語・スペイン語(26版)

六言語

ラテン語・ギリシャ語・イタリア語・フランス語・スペイン語・ドイツ語(1つの版)

七言語

- ① ラテン語・ギリシャ語・イタリア語・フランス語・スペイン語・ドイツ語・フラマン語(4つの版)
- ② ラテン語・ヘブライ語・ギリシャ語・フランス語・イタリア語・スペイン語・ドイツ語(41版)

八言語

- ① ラテン語・ヘブライ語・ギリシャ語・フランス語・イタリア語・ドイツ語・フラマン語・スペイン語（1つの版）
- ② ラテン語・ヘブライ語・ギリシャ語・フランス語・イタリア語・ドイツ語・スペイン語・英語（12版）

九言語

ラテン語・ヘブライ語・ギリシャ語・フランス語・イタリア語・ドイツ語・スペイン語・英語・フラマン語（1つの版）

十言語

ラテン語・ヘブライ語・ギリシャ語・フランス語・イタリア語・ドイツ語・スペイン語・ポーランド語・ハンガリー語・英語（7つの版）

十一言語

ラテン語・ヘブライ語・フラマン語・ギリシャ語・スペイン語・フランス語・ポーランド語・イタリア語・ハンガリー語・英語・ドイツ語（5つの版）

以上のように数多くの版が出版される中、日本語・ポルトガル語の含まれるものは、1595年の天草版羅葡日辞書ただひとつである。ヨーロッパにおけるカレピーノ辞書研究史においても、極めて貴重な一版で、私の知る限りでも、何人かのラテン語辞書史専門家が、その研究に注目している。ただ残念ながら、羅葡日辞書出版まえの約100年の間に出版されたカレピーノ辞書は現存するだけでも160版あり、その中のどれに基づいて羅葡日辞書が作られたかがまだ確定されていない。それがわかれば、日本においてどのような辞書項目が削られまた付け加えられたかを含め、様々な意味のある研究が進められよう。

6. ドチリナの受容と変容

イエズス会編纂ドチリナ諸版は、児童用の教材として編まれた対話形式のマルコス・ジョルジュ著ポルトガル語版（1566）が基になっている。これを「規範」に世界各地でどのような受容、変容が見られるかをこの何年か考えつづけている。まだまだ調査研究が不十分ではあるが、これまでにわかったことのいくつかを、ここに書き記す。まず、アフリカのものを、たとえばコンゴ語版ドチリナは、ジョルジュの原本表現を含み、ポルトガル語・コンゴ語一行おきの逐語訳対訳で、もっとも原本表現に忠実になされた翻訳である。ブラジルのものは、まだ調査が不十分で何とも言えないが、

アフリカのものに比べると、その内容が多少変容している。（このブラジルにおけるドチリナの受容と変容については、最近、ブラジルの若手研究者が精力的に研究を始めていて、近い将来、刊本と共に写本に関する研究の成果も公にされることが期待される。）インドについては、タミル語のものはまだ（少なくとも私は）全く読むに至っていない。ここ何年か取り組んでいるコンカニ語のドチリナについてだけ少し述べることにする。

コンカニ語というのは印欧語の一つで、今でもゴアを中心にインド西海岸沿岸に百万人以上の話者をもつ。（注5）このコンカニ語によるドチリナが、英国出身のイエズス会士トマス・スティーヴンス（ポルトガル語名、トマス・エステヴァオン）注6）によって編纂され、著者没後の1622年にラショールで刊行されているが、ここに至ると当時のインド社会を背景にした様々な変容が見られる。たとえばジョルジュのポルトガル語原本にある「こども」ということばを含む表現（46例）がすべて削除されている。また「三位一体」について、次のような原本にはない遣り取りが見える。

- 師 「三位一体とはどんな意味か」
弟子 「父なる神と子と聖霊が三者で一つの神であるということです。」
師 「父は神なのか」
弟子 「はい。」
師 「子は神なのか。」
弟子 「はい。」
師 「聖霊は神なのか。」
弟子 「はい。」
師 「では神が三人いるのではないか？」
弟子 「いいえ、この三者は（この三者でもって）ただ一つの神なのです。」（28r）

また次のような表現もコンカニ語版で加筆されている。「眼、土地、父や母、自身の命、その他いかなるものに対しても誤った誓いをしてはならない。」（35r）「（三つ目の大罪それは）貧しい人、未亡人、そして孤児を虐げ、ひどい扱いをすること。（四つ目の大罪それは）働くものに給与を与えないこと。」（46v）など。コンカニ語版におけるこうした削除や加筆をどう解釈するかは、イエズス会のインドにおける布教方針やその頃のヒンドゥー教の習慣なども念頭に、慎重になされねばならないと考える。（たとえば、なぜ「こども」という表現がすべて削除されてしまったのか、また「眼や土地や父・母や自身の命に対して誓いを立てる」と

いうことは、当時のインド（の一部）で、一般的だったのか。）

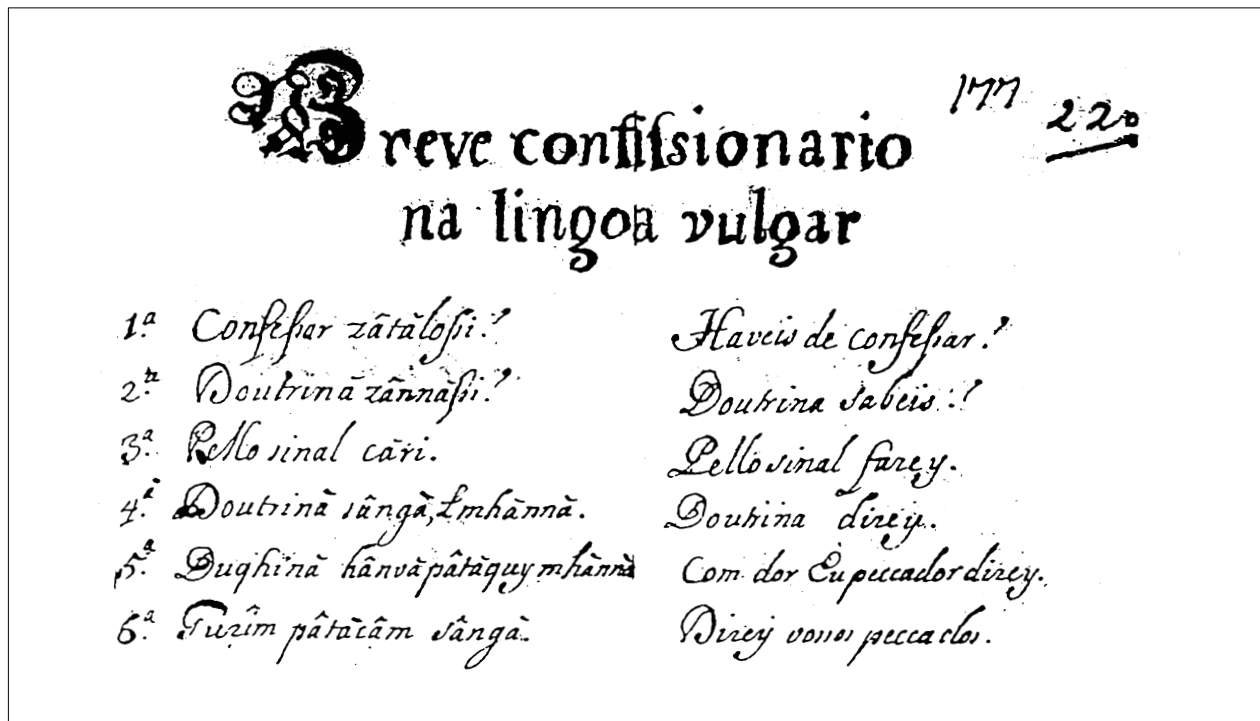
日本のドチリナにおける変容（文中の補足，付加と削除，形式の変化，順序と内容の変化など）については下記の研究書を参照されたい。

亀井孝・チースリク・小島幸枝 「日本イエズス会版キリシタン要理」（岩波書店 1983）

全体に関するものとして，原本において「師」が質問し，「弟子」が答えるというスタイルをとっているのに対し，日本のドチリナにおいては「弟子」が「師」の質

問に対したとえば「其儀をこまかに分別せず。願はくは教へ給へかし。」と応答し，「師」が「弟子」の質問に答えるというスタイルに変わっている。これを上記の著書では，「問答形式の東洋化」と捉える。

ところで，ドチリナは本来，暗誦しやすい詩文の伝統に連なるものと思われる。数は少ないが，私がこれまで見てきたポルトガル語，コンカニ語ドチリナ関連文書の版本，写本中，二言語対照でそれぞれに美しい韻を踏む一節で，一番印象に残るのは次のようなものである。（エヴォラ公立図書館蔵の18世紀写本と思われるもの）注7）



(BPE-F. RIVARA-ARM. I-2-No. 26-220r)

コンカニ語

（括弧内は試みに英語に訳してみたもの。）

- 1 . Confessar zâtálossi? (Will you confess?)
- 2 . Doutrina zânássi? (Do you know the Doctrine?)
- 3 . Pello sinal câri. (Do the sign of Cross.)
- 4 . Doutrina sângã & mhãnnã. (Tell and say the Doctrine.)
- 5 . Duqhinã hãnvã pãtãquy mhãnnã. (Recite “I confess” with penitence.)
- 6 . Tuzim pãtãcãm sângã. (Tell your sins.)

ポルトガル語

- 1 . Haveis de confessar? (Will you confess?)
- 2 . Doutrina sabeis? (Do you know the Doctrine?)
- 3 . Pello sinal fazey. (Do the sign of Cross.)
- 4 . Doutrina dizey. (Say the Doctrine.)
- 5 . Com dor Eu peccador dizey. (Say “I sinner” with penitence.)
- 6 . Dizey vossos peccados. (Say your sins.)

上記下線部がそれぞれにお互い響きあっていることは確かで，コンカニ語の4行目では，その（響きの）ためにわざわざほとんど同じ意味の二語を “sanga & mhanna” (tell & say) と並べている。1622年にイン

ドで刊行されたコンカニ語ドチリナ中、この二語は何度も登場するが、それぞれ単独で使われていて、“sanga & mhanna”の用例は一例もない。これら二語を上記写本のように並べて使うことが当時の決り文句であった可能性は少ない。やはりこれは「韻」を踏むために、ここであえて巧まれたものであろう。これはドチリナをはじめとするカテキスモが、その名の示す通り「口伝の教え」であったことを示すもので、当時のドチリナを字面だけ追って解釈しようとするには無理のあることを教えてくれる。(注8)

7. キリシタン文献とその翻訳

翻訳は「創造」である。そしてキリスト教にとって、「翻訳」は生命(いのち)である。(注9)「キリシタン文献」の翻訳はどのようになされたのであろうか。「キリシタン文献」を翻訳論から見る道を本格的に開かれたのは、私もかつて教えを受けた亀井孝先生である。(「翻訳論から見たきりしたんの翻訳」亀井孝論文集6)先生の論文は、たとえばヨハネ福音書の一句、

Ego sum via, et veritas, et vita. (Jo., 14,6)

の翻訳がどのようになされたものであるかを論じている。その1596年のコンテムツス・ムンヂにおける翻訳は次のようになっている。

Vareua core michi nari, macoto nari, jumiō nari.
(Contemptus Mundi p.331)

ここで「みち」「まこと」の次に素朴に期待されるのは「いのち」ということばであろうが、この翻訳では「寿命」ということばが選ばれている。同じ文献に「いのち」ということばは何度も出てくる。なぜ、ここでは「寿命」が選ばれたのか。それは原典の頭韻 v v v が日本語の m m m に対応する、と解釈される。(「寿命」のばあい、m は頭ではないが語中に含まれる。)そしてさらに大切なことは、ヴルガータが頭韻の機能に託した表現を、ただうわべにおいてのみうつそうとしたに留まらず、日本語の「文の展開のしかた」に変容せしめていること。ego をただ「われ」とせずここでは「われはこれ」として、文の主題としての「われ」にアクセントをくわえ、「...なり...なり」とたたんでゆく当時の日本語に固有の慣用のくりかえしにうったえる、これこそ原文における頭韻に対応するものとみるべきであろう、とされる。(ここまでのまとめは極めて粗く、あるいは先生の論文の読みとして誤ったものかもしれない。どうか上記論文に直接当たられたい。)

これからドチリナの様々な言語への翻訳を考える時、私としては「翻訳の結果」(完成度)を論ずると共に、「翻訳の経過」(プロセス)を解釈し、評価することも、

同じか、時にはそれ以上に大切にしていきたいと思っている。いずれにせよ、日本の歴史において「翻訳」が本格的に始まるのは、キリシタン時代が始めてである。それまでの日本独自の「訓読」の歴史と共に、もう一度、日本における「翻訳」の歴史の、その始まりについて考えてみることに意義はある。

8. 文法書の受容と変容

「古典(規範)」としての文法は、400年前の欧州、特にポルトガルにおいては、ラテン語のそれであった。16世紀という、規範としてのラテン文法を基にいわゆる「俗語」の文法がポルトガルでも誕生し始めた時期、ポルトガル人の進出したアフリカ・ブラジル・インド・日本では、ラテン文法の枠組みでそれぞれの土着語の文法が書かれることになる。その際、基本的には規範としてのラテン文法の枠内で書かれるものの、日本のようにラテン文法の規範と、そこから派生したポルトガル語文法の「準規範」にも影響されつつ、一方で、その土地(日本)における文法学の伝統にも影響されながら、はじめての西洋人による文法の誕生するところがある。

ローマ字表記における受容と変容は概略、次のような過程を経る。まず16世紀までのポルトガルではラテン語にないポルトガル語の音をどう表すか、が大きな課題となる。様々な表記の可能性が試されながら、16世紀に四つのポルトガル語文法書(正書法書)が刊行され、ポルトガル語正書法が確立していく。ここに至り、ラテンアルファベットという「規範」を基に「準規範」としてのポルトガル語表記がほぼ成立する。キリシタン文献語学書においては、さらに、それらの「規範」「準規範」をもとに、アフリカ・ブラジル・インド・日本各地現地語について、ラテン語・ポルトガル語にない(現地語の)音をどう表すかが次の課題となる。このようにして、「規範」「準規範」を基に室町末期日本語について考え抜かれて成立した独自のアルファベットが「キリシタン文献日本語ローマ字表記」である。

文法においても同様のことが言える。今「品詞」に例を取るなら、「規範」としてのラテン語は八品詞で記述される。「準規範」のポルトガル語では「冠詞」が加わり、九品詞の枠組みになる。日本語ではそれに「助辞」が加わり、(ロドリゲスの文法書では)十品詞の枠組みとなる。日本語にも「冠詞」がある。(それについては、「ザビエルとロドリゲス」南山大学ヨーロッパ研究センター報第6号を参照されたい。)それは上記「準規範」の影響の基に成立した日本語文法の一品詞である。また最後の一品詞「助辞」が、それまで

の日本における「てにをは」研究の影響を受けて成立したものであることも、これまた明らか。こうして日本という新しい土地で、ラテン語、ポルトガル語、そして（現地日本における）日本語の研究が融合して、新しい文法が成立するのである。

9. 語学書以外のキリシタン文献

ここまで主として、私が現在扱っているキリシタン文献語学書について語ってきたが、キリシタン文献は語学書以外に、先程言及したコンテムツス・ムンチのような宗教書、イソップ物語のような文学書、また科学に関する文献をも持つ。1610年に長崎で刊行されたラテン語版のフロスクリ（聖教精華）には新旧約聖書、教父や教会関係の書とともにギリシャ・ラテンの賢哲の書からとった名句が見える。ルイス・デ・グラナダの書から日本語に訳され1599年長崎で刊行された「ぎやどペかどる」（罪人の導き）にも、「ありすとうてれす、せねか、ぶるたるこ、ゑるくれす」等のことばが「...の云く」のかたちで日本語で収録されている。また、最近それまで知られていたラテン語本の他に日本語本も発見されたイエズス会日本コレジヨ「講義要綱」もヨーロッパ科学思想受容史上、極めて重要なものである。1593年には完成していたとされる「講義要綱」（ラテン語本）の第1部「天球論」は、国立公文書館内閣文庫所蔵の小林謙貞「二儀略説」（1715年）の構成と内容にほとんど同じであるという。（尾原悟「イエズス会日本コレジヨの講義要綱Ⅰ」（教文館 1997））そうしたものの研究の方が思想史や文化史との関連が深く、より多くの人々が関心を持たれるのは、あるいはむしろそちらの方なのかもしれない。ただたとえば「宗教書研究」と一口に言ってもその多くは「中世におけるカトリックの伝統のみならず西洋古典にせいぜいふかき素養あるべきがのぞましい」（注10）研究分野であることは誰の目にも明らかで、とても私の手には負えない。遠くない将来、「古典学の再構築」に参加されている、上記のような素養を持った方々が、そうした文献の研究に本格的に着手されることを願っている。

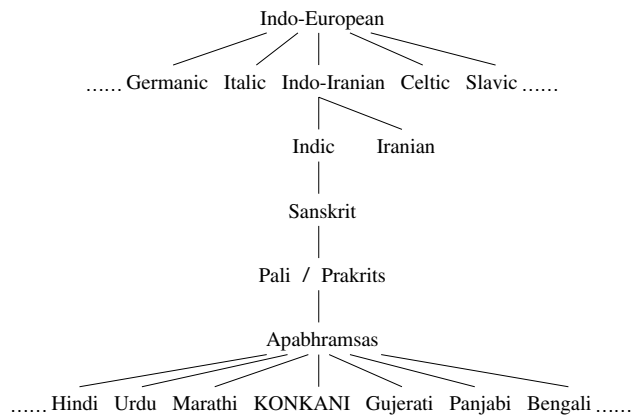
10. おわりに

「古典」としてのキリシタン文献について語学書を中心に、思いつくまま、多少散漫な形で、述べさせていただいた。「キリシタン文献」と一口に言っても、現在という視点から見るとその扱うテーマは様々で、研究上まだほとんど手のつけられていない分野、詰め不十分な分野が多く、これからの研究に期待される

部分も多いということがわかっていただければ、幸いである。

【注】

- (1) 今道友信「ヒューマニズムとしての古典研究」（古典学の再構築 5 平成12年1月）
- (2) 堀池信夫「中国文明と中国古典」（古典学の再構築 7 平成12年7月）
- (3) デ・ウイット・スターンズのことば（ジョナサン・グリーン「辞書の世界史」朝日新聞社による）
- (4) Albert Labarre の Bibliographie du Dictionarium d'Ambrogio Calepino (1975) による。
- (5) コンカニ語の系統は概略、以下の通りである。



コンカニ語がひとつの独立した言語なのか、それともマラーティ語の一方言と見なすべきなのかについては、長い論争の歴史がある。コンカニ語は現在、主として、インド西海岸沿いに位置するゴア、インド南西部カルナータカ州のアラビア海に沿う北カナラ・南カナラ、そしてインド南西部ケーララ州マラパール海岸沿いのエルナクラム、さらにはゴアの北、マハラシュトラ州の一部でも話されている。コンカニ語がこのように地理的に離れたいくつかの地区で話されているのには理由がある。最も大きな理由の一つ、それは16世紀にポルトガル人達がゴアにやって来たことで、征服者（ポルトガル人）が被征服者（主としてヒンドゥー教徒達）に改宗を迫った時、現地の人々の選択は二つに一つだった。すなわち、キリスト教を受け入れるか、ゴアを去るか。この時ゴアを去ったコンカニ語を母語とする人々が、先程述べた地区にそれぞれ移住していった。もちろんこうした移住はそれ以後もさまざまな理由から行われ、コンカニ語拡散の要因のすべてがここにあるわけではないが、コンカニ語に大きな地理的変異をもたらすに至るはじめの大きな事件のひとつであった。こうした地理的変異に加え、宗教の違いによる言語差も大きいようで、キリスト教徒とヒンドゥー教徒の間では、同じ「コンカニ語」といっても相当の違いがある。さらには、独自の文字を持たないコンカニ語は、使用する文字の違いにも影響されている。ゴアのヒンドゥー教

徒達（ゴアには16世紀に大部分の人達がキリスト教に改宗したポルトガル旧征服地と18世紀になってポルトガル人の入った新征服地があり、その新征服地には今でも多くのヒンドゥー教徒が住んでいる）はマラーティ語の影響下デヴァナガリーを使い、同じゴアのキリスト教徒はポルトガル人の影響でローマ字を使用、カルナータカ州（北カナラ・南カナラ）ではカンナダ語の影響下、コンカニ語はカンナダ文字で写され、ケーララ州ではマラーラム語の影響下、マラーラム文字で書かれる。これら四種の文字を使う人々は（同じコンカニ語を写していても）、一般には、互いの文字が読めないようである。これまで述べ来たことに加え、カーストの違いにも大きく影響されていて、現在のコンカニ語はその様相をさらに複雑なものにしている。（「Thomas Stephens とコンカニ語 研究序説とその展望」(南山国文論集 23 1999)より)

- (6) このスティーヴンスの書いた手紙が二通現存している。父と兄弟に宛てたもので、前者（1579年）は英語、後者（1583年）はラテン語でそれぞれ書かれている。そのうち、ラテン語で書かれたものの中に次のような主旨の一節がある。「当地には多くの言語があるが、その発音は上品で（言語の）構造はギリシャ語やラテン語のそれに似ている。またその章句や構文には感嘆すべきものがある。」これを印欧比較言語学との関係でどう評価するかは意見の分れるところであろうが、ウィリアム・ジョーンズの有名な講演（1786年）より200年以上前に、インドの諸言語とギリシャ語・ラテン語との類似について発言していた人がいることは記憶に留めておいてもよい。（注5で言及の論文参照）
- (7) コンカニ語を母語とされる（現在ポルトガル在住の）Teotónio R. de Souza 先生には、コンカニ語、ポルトガル語の読み誤りを指摘していただいた。これまでのご教導に対してもここに御礼申し上げます。
- (8) 上記二語にはコンカニ語を母語とする人には明らかなニュアンスの違いがあり、文字通り「同じ意味」ではもちろんない。
- (9) 佐藤研「新約聖書と翻訳」（「聖書と日本人」大明堂2000年）を参照されたい。
- (10) 亀井孝「愛語愛言のたましいのために」（亀井孝論文集 6 吉川弘文館1992）

【追記】

最後に、私がこれまで「古典学の再構築」公開シンポジウムなどに出席して感じたことをひとつずつ付け加えさせていただくことにする。そこで扱われていたほとんどすべての分野に関し私は素人であり、ここに記すべきかどうか迷ったのであるが、意のあるところをお汲み取りいただければ幸いである。

確かに、日本には中国や西欧と比べ「核のある」「確固とした」古典はないのかもしれない。しかし、だからこそ、他文明の古典を柔軟に「取り入れ」自らのものとしてきた。これは恥かしいことではなく、一面誇

るべきことではあるまいか。中国が長い間、日本と接しつつ源氏物語を「知らなかった」と対照的である。（上垣外憲一「日本文化交流小史」中公新書）日本は謙虚に他文明に学びながら、それらを自らのものとしてきた。その受容、変容の過程を見る中で、現在に至る日本文化の性格について考えることが大切であろう。

また、世界の他の文明圏と比較して、「行為規範」としての「古典」は確かに日本には存在しないかもしれないが、「表現規範」としての「古典」なら、時代時代に少しずつ形を変えながら存在していると言える。私達の研究班の福田・南里・竹田さんの扱われる「古今集」などはそのいい例であろう。「古典」というものを絶対化する世界と、時代時代に違った形で、あるいは他からの「規範」を柔軟に取り込んで行く形で「古典を創造していく」世界があり、後者のような「古典観」を否定する必要は全くないのではあるまいか。一方で、日本においては、たとえば江戸期に入って、あるいは明治期になってから、何が「古典」とされ、何が「捨てられて」いったのか、ということを見ていく視点も必要となろう。

もうひとつ、先日、友人のイギリス人と（日本語で）話をしていた、彼が「聖書」を「古典」とすることに強く反発したのに戸惑いを覚えた。「ギリシャ・ラテンの諸文献は古典だが、聖書は断じて古典ではない。」と言う。特に信仰の篤い人ではない。ヘブライ語やアラビア語で「古典」を何と云うのか知らないが、「聖書」や「コーラン（クルアーン）」のような聖典を「古典」と呼ぶことに、それぞれの文明圏で生活する人々は違和感を持たないのであろうか。その辺りの事情を知らない人間の素朴な疑問で恐縮だが、「古典学の再構築」の中で聖典を「古典」として捉えることと、それぞれの文明圏で生活する人々の意識の間にも大きな違いがあるとしたら、それについて少し考えてみることも大切なのではないだろうか。今道先生が昨年夏のご講演中、「聖書」に全く言及されなかったことも、ここに思い起される。「聖書」を直接の研究対象としていなくとも、それに連なる諸文献について考察を進める私自身の問題でももちろんある。もし今、仮に（仮にである）、すべての文明圏の「古典」から聖典をはずしてみた時、そこには何か見えてくるものがあるのだろうか。

以上、本論と直接、関係することではないが、現在、思うところを記させていただいた。お許しいただきたい。

(2000.10.10.)

(B02「伝承と受容(日本)」班・公募研究)